



山



川崎ゆきお

「最近山について思うのですよ」

「山ですか」

「そこに見えている山だがね」

遙か彼方に山並みが見える。よく見ると三方に山がある。それらは繋がっていないが、山に囲まれていることは確かだ。一方は海だ。それも遠いので、ここからは見えない。

「山がどうかしたのですか」

「人が住んでいない」

「ああ、そうですねえ。斜面には家が建ってますが」

「地図で見るとね。ネット上の地図だが、何も無い。山があるだけ、町がない。村もない。寺ぐらいあるかもしれないが、さっぱりしたものだ。情報が無い。白紙のようなものだ」

「それが何か」

「この周辺の山は殆ど踏破しました。若い頃ですがね。だから、どのような状態になっているのかは、知っていますが、山道ばかりを気にしていました。だから、麓から離れるほど人工物が消える。ハイキングコースとなると、もう車も走っていない。道はあるが、電柱はない。人が住んでいないからだね。林道なんてのがあって、そこは車が入れる。しかし殆どが沢にある。山の切れ目に峠がある。できれば坂道は避けたい。だから、最短距離になるよう、低いところを越える。頂上なんて行く必要はない。だが、ハイキングは別で、頂上を意識する。尾根歩きだね。頂上伝いに歩く。高いところの方が見晴らしがいいしね。このあたりの山のハイキングコースはそんなものだ。市街地が近いので、山が浅い。しかし、できるだけ人が来ないようなところばかりを歩く。自然に近いからね。人工物を見に来たんじゃないんだから」

「はい」

「ところが最近、人がいない山、人工物がない山、まあ、高圧線や電波塔ぐらいはあるだろうけど、そういう山々の広さが怖くなってきてねえ。誰もいないんだ」

「まあ、林業の人とかいるでしょ」

「そうなんだが、そこに住んでいるわけじゃない。人口密度が低いと言うより、いない」

「だから、昔からそこは人が住むところじゃなく、神が住むところだったのでしょ」

「そうなんだ。最近それに気付いた。何も無いところじゃないけど、ハイキングで遊び半分に来

る人はいるけど、これは必要なことじゃない」

「山の神の話ですね」

「何もない。人がいない場所。だから、神がいる。そう言うことだろうかなあ」

「でも、殆どの山は植林ですよ。昔から切り倒していますからねえ。奈良盆地、平城京も切る木がなくなって遷都したらしいですよ」

「そうだね、レンガを焼きすぎて、木を使い果たした古代都市もあったねえ。京都盆地はどうだろう」

「平安京ですね。幕末あたりの写真があればいいんですが、結構禿げ山になっていたんじゃないですか」

「それは注意して見ていなかった」

「この辺りの山も、大きな城を建てる時、結構切って禿げ山になったらしいですよ」

「そうか、呑気に山の神の話をしていたが、神も大変だな」

「そうですよ」

「山は人がいないどころじゃなかったんだ」

「そうですよ」

「いやいや、それでも人が住んでいない土地が、こんなに広いと、やはり不気味だよ。用心が悪い」

「そうですね」

了